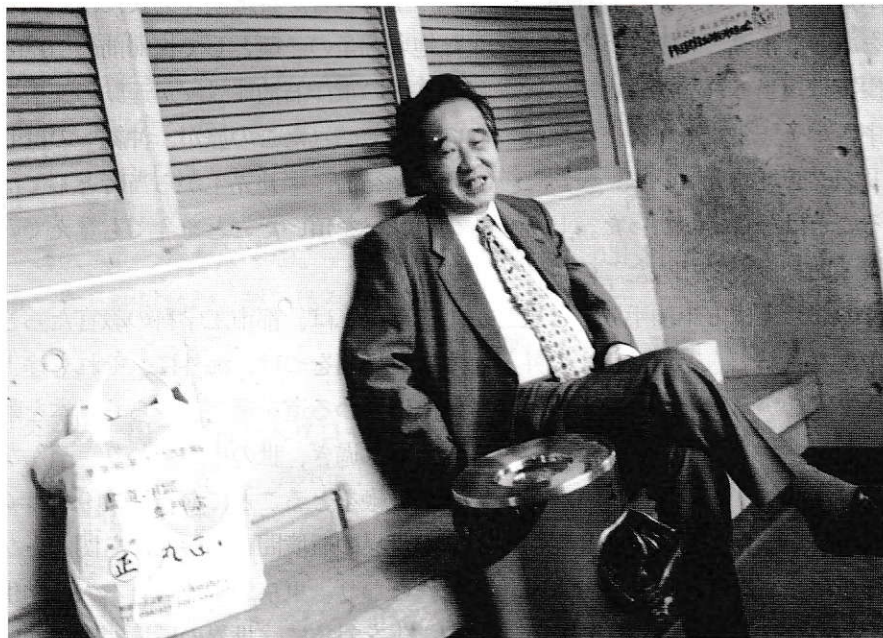


■おきなわ環境ネット■

沖縄環境ネットワーク通信 35号



宇井 純先生追悼特集

宇井 純先生の思い出

宇井先生の「課外授業」と「宿題」

宇井先生から学んだこと

変わってしまった私の人生

宇井 純先生を偲ぶ

宇井先生のこと

宇井先生と新石垣空港

追悼文

宇井先生を偲ぶ会 レポート

私にとっての宇井先生 ～宇井先生をめぐる座談会より～

《環境情報おきなわ》

… 桜井 国俊

… 砂川 かおり

… 上原 辰五

… 仲西 美佐子

… 内海＝宮城恵美子

… 大城 順子

… 鷺尾 雅久

… 真喜志 好一

… 酒井 哲哉

宇井 純先生の思い出

桜井 国俊（沖縄大学学長）

私がはじめて宇井純先生と出会ったのは、1964年、今から40年以上前のことである。新しく出来た東京大学工学部都市工学科の一期生として駒場から進学したときに、助手として着任し、水質実験の実習でわれわれ衛生工学コース一期生10名を厳しく指導して下さったのが宇井先生だ。助手だから授業は担当されなかったが、後に助手として着任された中西準子先生（現（独）産業技術総合研究所・化学物質リスク管理研究センター長）とともに、実力が抜群であることは一目でわかった。しかし東大土木の出身者で教授・助教授をかためたこのコースでは、東大応用化学出身のお二人は万年助手にとどまり、土木出身の大学院生が次々とお二人を飛び越えて昇進していくことになる。遅まきながら世の中には矛盾があると実感することになった。

その後、私は大学院に進学して修士を終え、1968年に博士課程に進んだ。そのまま何事もなければ、多分東京大学に残ることになったであろう。しかし68年5月、東大では医学部学生不当処分をきっかけに大学のあり方を問う東大闘争が勃発する。都市計画の審議会の場で、あるいは高度成長の過程で多発した公害問題に関して、政府の御用学者として発言を繰り返すことの多い都市工学科の教官たちを見ていたわれわれ大学院生は、医学部学生の運動に呼応して東大にノンの声を上げた。そして都市工学科は、東大闘争での最大激震地となっていたのである。68年は宇井先生がWHOのフェローとしてヨーロッパ留学をされた年である。オランダでパスフィア博士に会い、酸化溝法の伝授を受け、後の宇井先生の活動の大きな礎となったのがこの留学だ。パリの5月など、世界中の大学が燃えた年に、宇井先生はヨーロッパで東大闘争の成り行きを案じておられたに違いない。

1969年1月には安田講堂での学生と機動隊の攻防があり、宇井先生が大学に戻られたときには、東大闘争は学生の敗北で終結していた。われわれ衛生工学の大学院生は、大学からまちに出て地域闘争に入ることになる。高度成長の過程で頻発した公害問題に、教官たちのように加害者の側に立つのではなく、専門性を生かして水質

汚染のデータを取り、被害者の主張に役立てようと意図したのである。われわれが最も深く関わったのは、富士田子の浦の製紙工場による汚染への反対運動であった。私の指導教官が審議会の会長だったからである。そうした地域闘争の一環として復帰前の70年に沖縄を訪れた。中城湾の東洋石油建設反対運動の支援のためである。波の上丸で訪れたこの旅が、沖縄へのはじめての旅であった。出発前に宇井先生から当時としては大金の5000円のカンパを頂いたことを今でも覚えている。

その後私は、都市工学科の教官たちとの激論を経て日本に見切りをつけ、海外に、それも途上国の環境問題の解決に携わる道を選び、長らく日本を離れることになった。時は過ぎ、世の中が変わり、そんな私が東京大学に戻り教鞭をとることになった。1992年のことである。日本が世界の環境問題の解決にも関わらなければならない時代となり、東京大学でも日本人の学生やアジアからの留学生を対象に、世界の環境問題について教えることが不可欠になったのである。1990年に妻に早世され、あとに高校1年と小学6年のこども2人を残されたことも日本に再定住する道を選ぶきっかけとなった。

しかし1995年、私は勤務わずか3年で東京大学をやめ、住んでいた東京都武蔵野市の市長選に出た。市民が主役の町をつくろうという市民運動に関わっていて、誰かが立候補しなければならなかったからである。1999年にも再度チャレンジし、宇井先生には私の推薦人になって頂いていた。しかし先生はペンネーム通りの富田八郎（とんだやろう）で、「負けないかな。負けたら沖縄大学に来てくれ」と公言して憚らず、選挙が惜敗に終わったとき、「負けて良かった」と武蔵野市民の前で発言し、大顰蹙を買ったのである。こうした経緯で、最初の沖縄訪問から丁度30年後の2000年、私は沖縄大学に勤めることになった。武蔵野市長選に2度も負けたのは今もって口惜しい限りであるが、結果として私は、大好きな沖縄に来ることができ、また沖縄大学という沖縄にとってなくてはならない大学で働くことが出来た。こうした機会を与えて下さった宇井先生には本当に感謝している。

宇井先生にはついぞ報告することが出来なかったが、宿敵の武蔵野市長に対しても裁判でリベンジすることができた。「市民の税金を使って（市長が支援者から）購入した土地について、何の目的で購入したのか、いくらで購入したのか、情報公開しないのは許されない。情報公開すべきだ」として最高裁まで争った行政訴訟で私が勝利したのである。2005年の武蔵野市長選で私の友人が勝利したことも宇井先生に報告できないままだった。

ところで沖縄大学に着任した2000年は、G8沖縄サミットの年であり、大変な騒ぎであった。沖縄環境ネットワークは、宇井先生が中心になってカウンターサミットとしてNGO国際環境フォーラムをG8サミット直前の2000年7月に沖縄大学で開催することを企画し、赴任早々私もそのお手伝いをするようになった。ところが宇井先生が発病され、新米の私が急遽フォーラムの責任者となり、沖縄環境ネットワークの会員の皆さんとてんやわんやで取り組むことになるのである。着任早々で講義ノートの準備を進めながらであり、今思い出しても本当に綱渡りであった。何しろ、フォーラムの準備に駆けずり回っている私のところに学生たちが来て、教室で授業が始まるのをみんな待っていると告げたのである。10年以上教師稼業をしているが、授業を忘れてしまったのは後にも先にもこの時だけである。

さて、宇井先生は、歩いて考える現場重視の研究者であった。しかし、振り返ってみると、私がフィールド調査で宇井先生のお供をしたのは、あまり多くない。もっと一緒に現場を踏み、多くの啓発を受けるべきであったと悔やんでいるが、あとの祭りである。そうした中で特に印象に残っている調査は、宇井先生、保坂公人さん、後藤哲志さんと一緒に中米ニカラグアの環境汚染調査を行ったときのことである。1996年1月のことだ。

アメリカの裏庭のニカラグアではサンディニスタ革命が頓挫し、グローバリゼーションの波に飲み込まれ、その影が経済のみならず環境にも色濃く刻まれていた。国際綿花価格の低迷で地主は綿花畑の耕作を放棄し、様子見のためのマイアミ暮らしが多かった。土地なし農民には仕事がなく、失業率は60%~70%という信じられないほどの高さであった。農地には、セスナ用の滑走路が至るところにあり、農薬を空から撒くスタイルの綿作が展開されてきた。そこで撒かれた農薬は、アメリカでは使用が禁止されたDDT、BHC、トキサフェンなどであ

り、地下水が回復しがたいまでに汚染されていた。アメリカは、自国での使用は禁止していたが、これら農薬の製造と途上国への販売は禁止していなかったのである。数少ない汚染されていない貴重な水源を利用して飲料水供給が行われていたが、清浄な水資源の不足は極めて深刻であった。仕事はなく、あるのは修復の著しく困難な有機塩素系農薬による環境汚染という、踏んだり蹴ったりの状態であった。

そこで宇井先生が提案されたのは、飲料水供給の結果として発生する下水を途上国向けの簡易な技術（酸化池）で処理し、その処理水を農業用水として利用するという説得力のあるものであった。農薬汚染されていない水資源をカスケード使用しようという考えである。歩いて考え実践的な解決法を見出す、現場重視の研究者の真骨頂を見る思いがした。このニカラグアへの旅では、新月の街灯もない田舎道を歩いていて無灯火の自転車にぶつけられ、私は左腕を骨折してしまった。ままにならない左手をかばいながらパソコンを叩き、ニカラグア政府への提案書づくりをしたのも、今となれば良い思い出だ。

大学で、自主講座で、そして市民運動で、こうした宇井先生の現場に立って考え実践していく姿に接して啓発を受けた人々は極めて多数にのぼるはずだ。そのうちの一人として、私も先生のご遺志を受け継いでいきたい。ここから先生のご冥福をお祈りする。



宇井先生の「課外授業」と「宿題」

砂川 かおり（沖縄環境ネットワーク世話人・バーモント法科大学院環境法研究修士課程）

私が宇井純先生に初めてお会いしたのは、1994年の夏、沖縄県那覇市の「久茂地川フェスティバル」の打ち上げの席でのことでした。あれから12年。研究活動、環境運動など様々な機会を通して、先生からは多くのことを教えていただきました。今回は、「課外授業」を通して、先生から学んだ2つの大切なことと、最後の「宿題」について、皆さんと共有できればと思っています。

宇井先生から学んだ大切なことの一つは、自らの社会を時間的・空間的により大きな視点で理解することです。社会学者のイヴァン・イリイチ氏の受け売りだとおっしゃって、100年位の長期的視野で自らの社会を捉えることの大切さを先生は強調されておられました。宇井先生は、慣行上地域の共有財産であった杣山（そまやま）を「武士」に払い下げる「杣山処分」（1899年）をめぐって、日本政府から任命された奈良原知事と対立し、後に「沖縄の自由民権運動の父」と評されるようになった沖縄県技師の謝花昇氏（1886～1908年）の活動を、沖縄の自然保護活動の原点として高く評価しておられました。謝花昇氏の活動については、私がこれまで受けてきた教育の中で学んだことがありませんでしたので、とても勉強になりました。100年という長期的な視点で社会の変遷を捉えることで、どのような価値に普遍性を見出し、何を私たちと次世代のために守り、伝えるべきか、その指針となるものを学ぶことができたように思います。

2つ目は、様々な社会問題に対して「第三者」ではなく当事者意識を持つということです。公害問題が空間的な広がりを持って「地球環境問題」と呼ばれるようになって、「環境問題においては、第三者は存在しない」と先生はよく強調されておられました。日本の高度経済成長の中で生じた公害問題は、私たちの利便性と引き換えに作られたと言っても過言ではありません。「第三者」的立場をとり続けることで、問題を作り出している側に留まるのか、或いは「当事者」であることを意識し、問題解決のために主体的に活動

するのか、自らに問い続けることの大切さを教えていただきました。

最後に、日本、特に沖縄の今後の方向性について、宇井先生が後輩となる私たちに、期待されていたことをお伝えします。私が最後に先生にお会いしたのは2005年の末で、小泉政権下で名護市辺野古における米軍基地の建設案として、V字型滑走路案が日米両政府によって合意された直後のことでした。その際に先生は、渡邊昭夫氏（東京大学名誉教授）の「日米関係と太平洋—二十世紀史再考—（夕食会講演）」（東京大学学士会会報No.854）をくださいました。この講演記録を引用しながら、先生は「今後も米国と中国という2つの大国のパワーがぶつかり合う中で、50年後、100年後に、沖縄にどれだけの『政治的自由度』が確保されているかが重要だ」と、沖縄のことをとても心配しておられました。また、「今のままのアメリカ一国主義は、いつまでも続かない。いずれ方向転換を迫られるアメリカの外交政策にあって、自然資源に溢れた辺野古の海に新しい米軍基地を建設することは、沖縄県民にとってどれほどの価値があるものだろうか」と、疑問を投げかけておられました。米国、中国という大国の影響を今後益々受けることが予想される沖縄において、沖縄がその対立の舞台になるのか、或いは、大国の協調や協働を促す役割を担うのか、沖縄県民の選択次第で、沖縄の「政治的自由度」は自ずから決まってくると思われまふ。

昨年11月に行われた米国の中間選挙で民主党が上院・下院で過半数の議席を獲得し、宇井先生が見通したように、アメリカの政治も大きく方向転換を始めています。長期的なビジョンを描き、勇気を持って、私たちと次の世代のために主体的に行動すること、これが最後に宇井先生から出された「宿題」ではないでしょうか。この「宿題」をきちんとこなせるように、私も日々努力していきたいと思っています。

「宇井先生から学んだこと」

上原 辰五（沖縄大学卒業生）

宇井先生が亡くなった昨年11月11日、私はいつも通り仕事で、午後からは東京・代々木で開催されていた講演会に参加していた。宇井先生の訃報を知ったのは、その講演会の帰り、JR代々木駅であった。沖縄に住む友人から「宇井先生が亡くなりました」とのメールを目にし、思わず言葉を失った。一緒に歩いていた友人が「どうしたの!? 顔面蒼白だよ。大丈夫!?!」と声を掛けてきたが、あまりのショックで気を失いそうになった。その場から動けなくなってしまい、しばらくその場に座り込んでいた。続々と入ってくる宇井先生訃報の知らせ。それでもなお、亡くなった事実を受け入れられないでいた。

私が宇井先生が存在を知ったのは高校3年生のときだった。「環境問題が学べる大学に進学したい」と高校の進路指導の先生に相談したときに一冊の本を紹介された。沖縄時事出版発行の「環境読本 沖縄の山・川・海（1996年発行）」である。「沖縄大学に宇井純先生という環境学者がいる。宇井先生のもとで学べるなら、あなた幸せ者だよ。この本の巻頭言で宇井先生が書いた文章があるから読んでみなさい」私にとって宇井先生の文章に触れたのは、そのときが初めてだった。

沖大入学後、すぐに宇井研究室を訪ねた。そこには穏やかな表情をした宇井先生がいらっしゃった。宇井先生のゼミに入りたいと伝えると「わかりました。最初は何てくるだけで大変だろうが、頑張っってついて来なさい」と笑顔で迎え入れて下さった。それからは、時間さえあれば科学実験室（宇井研究室）に顔を出すようになり、宇井研究室に事務局をおいていた沖縄環境ネットワークの活動にも自然と関わるようになった。これまで市民活動との接点が無かった私にとって、多くの市民活動との出会いは非常に新鮮なものであった。

宇井先生のもとで学び始めてまず驚いたことは、毎週木曜日の夜間のゼミを一般市民にも開放していることであった。そこにやってくるのは、役場の環境部で働く職員であったり、企業で働く人であったり、地域で活動し

ている市民団体の人であったりと多様で、実に様々な相談が持ち寄られていた。先生はゼミの時間が終わると、「食事でもしていきますか」とみんなに声をかけ、大学近くの居酒屋に場所を移しての議論が続くこともよくあった。宇井先生の素敵なのは、相手が誰であれ、相手の話が終わるまでじっと黙って聞き、それから話し出すというところだ。学生の未完成のレポートや調査であっても、報告のときは学生が話し終えるまでしっかり耳を傾けていた。

宇井先生の研究室は、書物やら学生のレポートやら郵便物やらで、机の上がいつ見ても山のようになっていた。一見、何がどこに埋もれているのかわからない状態だが、宇井先生の頭の中ではきちんと整理されていたらしい。また、時間さえあれば書物を読んだり、原稿を書いたり、パソコンの前に座って作業していたり、夜遅くまで研究室の灯りがついていて。休みの日でさえ「明日は相談者がやって来るから朝から研究室に出てきます。何かあったら寄って下さい」と話すことがあり、いったい宇井先生はご自身の休みをとっておられるのだろうか?と思うほどだった。

宇井先生の温かな人柄に触れれば触れるほど、「宇井先生の歩んできた道を知りたい」と思うようになり、宇井先生が書いた書物や新聞記事を読み漁ったこともあった。公害・環境問題の記事が当然多いが、「あしなが育英会」（病気や災害、自死で親を亡くした子どもたちを物心両面で支える民間非営利団体）の支援もしていることを知った。遺児を対象とした講義にも度々足を運んでいたという。私は宇井先生の活動の幅の広さ、奥行きに改めて驚かされた。大学教授の中には研究だけに没頭して学生の教育にはあまり関心がない人も多い中で、宇井先生は研究者としても教育者としても立派に活躍されていた。

宇井先生から学んだことはたくさんあるが、あえて一つ挙げるならば「社会的弱者の視点に立つこと、助けること」である。人の痛みを知らない、感じない人が多い現代社会において、宇井先生の取ってきた行動というのは、今の時代にこそ多くの人に知ってほしい、学んでほしいことだと思う。現在の政治を見ても、弱者の痛みを知っている政治家がほとんどいない。医療・介護制度の改革（改悪）は、ますます社会的弱者を産み、生きるこ

とさえ許されない状況に追い込んでいる。社会的弱者の視点で発言し行動できる人、つまり宇井先生のような人間が大勢いることが求められている世の中ではないだろうか。それは、宇井先生のもとで学んだ私たち教え子一人ひとりにも問いかけられているように思う。宇井先生のもとで学んだ精神は、私たちの心の中で完結するのではなく、社会の場で行動するなり、発言するなりで、継承していかなければいけないと思う。

宇井先生が亡くなってから2日後、ご自宅を訪ねた。その後、通夜、告別式とお手伝いをさせてもらった。水俣関係者、大学、研究者、行政、企業、市民団体、そして宇井ゼミ卒業生が大勢駆けつけ、宇井先生の最期を見送った。宇井先生のもとで学べた学生生活は私にとって生涯の宝であり、社会的弱者を助けるという精神はこれからの人生において中心に据えるべき目標であると思う。

恩師・宇井純先生、ありがとうございました。



変わってしまった私の人生

仲西 美佐子（沖縄環境ネットワーク世話人）

恩納村の南恩納区が、地域の水である簡易水道から企業局の上水道に変えられようとしているころ、宇井先生は沖縄にやって来られました。来沖された早々、新石垣空港反対の講演会に出席されたのを待ち構えて、「助けてください」としがみつきました。

それから沖縄大学に通うようになりました。「たとえ今、上水道に変えられたとしても、いつでも使えるように地域の水をキレイに保っていることが大事だ」と教え

られ、その方法の最短として廃食油リサイクル石けん（プリン石けん）の手ほどきを受けました。

有吉佐和子の名著「複合汚染」が世に出た頃から、私も石けんを使っていました。合成洗剤に慣れていたせいで、石けんは使い心地が悪いものでした。家族の不満を抑えながらの使用では、他人に勧めることはできませんでした。嬉しいことに、宇井先生から教わったプリン（状）石けんは市販の石けんより「水溶け良く におい薄く 泡立ち良い」使い心地の良いものでした。手前味噌もあいまって、人に勧めやすくなりました。

石けん作りも腕を上げ、プリン（状）石けんでは物足りなくなって、持ち運びの良い粉石けんが作りたいとなりました。そんな折、水俣から一人芝居の砂田明さんを通じて「しらぬい粉石けん」に出会いました。「しらぬい」の使い心地はこれまでの市販の粉石けんをはるかに超えるもので、「このような石けんが作れたら、石けんは簡単に広められる」と思っていました。先進地の水俣や川崎などを見学して試行錯誤を重ね、それから程なく持ち金をはたいただけでなく借金までして、「ちゅらさ石けん工房」を建設してしまいました。

「ちゅらさ石けん工房」は水循環の様子がわかるように設計しました。ここでは、水の大切さや集め方・使い方・処理の仕方に思いをめぐらせられればと思っています。ここで作っている石けんは粉石けんが主ですが、液体石けんの商品名は、宇井純先生の名前を頂いて「じゅんちゃんブクブク」です。初期の頃、多くの教え子が同一の商品名を使っていました。いつまでもこの名前を大切にしていきたいと思います。

南恩納区は上水道になりましたが、今でも自前の水を使用水として大切に保っています。さらに浄水施設も増改築し、今でも、多くの区民が水源地や浄水施設の清掃に参加しています。私はいつでも目標を持って進むたちではなく行き当たりばったりですが、そんな自分でも想像できなかった展開です。助けを求めての最初の出会いはさすがに宇井先生の手の中に吸い込まれてしまった感があります。石けんの伸びはイマイチですが継続は力です。宇井先生の一つの流れとして、私は水をきれいに保つ方法の最短としての廃食油リサイクル石けんを作り、使い、広めていきたいと思っています。

宇井 純先生をしのぶ

内海＝宮城恵美子（沖縄環境ネットワーク会員）

沖大地域研究所

1988年に沖縄大学が30周年を迎えるということで、記念事業として沖縄大学地域研究所を設立することになった。宇井先生が所長になると聞き、「私もお手伝いしましょうか」と尋ねると「エミさんが来てくれると助かる」との返事で、『何でも係』として採用が決まった。

宇井先生は『行動する学者』で近寄りやすいイメージがあったが、『現場主義』の先生と一緒に行動することがいろんな勉強になるだろうと考えた。当時の私は国策を押し付けられる沖縄の状況に、何とかしなければという問題意識が強く、住民運動のサポートとして走り回っていた。しかし先生は「あなたを1人の研究者として見なすから、そのつもりで」と講演や発表会で学外と一緒に出かける度におっしゃった。研究成果もなく新聞投稿に琉球弧合宿の報告文等しか書いていなかったが、先生は私に課題を与えていたのだろう。

さて当時、「CTSを阻止する会」で金武湾を守る会のサポートを行う一方、「琉球弧の住民運動交流合宿」が1979年からスタート、その事務局であった。この合宿は、沖縄全県的な住民運動や反基地、反公害運動や、市民運動の担い手が各地方から集まり、数日間合宿しながら、議論あり、歌・サンシンありの夏のイベントだった。79年に第1回金武湾合宿、80年第2回奄美大島合宿、81年第3回西表島合宿までは盛況に終了。82年第4回宮古島合宿、その頃から私は「合宿」の事実上の事務局長（運動が下火気味で推進役を買って出る人の減少もあり）で、83年第5回白保合宿に「なんとか」つなげた。

ところが、83年の白保合宿の終了日に台風が到来し、止む無く白保にとどまった数名（私もその1人だった）が、世界最大のアオサングの存在を知り、「問題の核心」に気づくこととなった。そこで、84年の第6回も再度白保合宿を行うことになった。白保に関しては「82年は宮古だったから次は石垣にしよう」と、当初から白保が決定的ではなかった。石垣の方に聞くと、「石垣で空港候補地が上がったうち、決まったのが白保だ」という程度の認知でしかなかった。「合宿」が環境問題の存在に気づくきっかけになり、後に、白保の海が全国に知れ渡っていくことになる。宇井先生は86年に沖大の教員として赴任され、来沖当初から新石垣空港問題に係わることとなった。

自主講座から沖縄へ

宇井先生は東大工学部の教室で自主講座「公害原論」を始められていた。水俣病を中心に公害の原点である足尾鉾毒事件から主要な公害問題を網羅して、それを被害者の立場に立脚し、社会科学として理論にまで高めた。それを市民・学生に公開され、自主講座は公害研究・公害反対運動のネットワークとして重要な役割を担っていた。自主講座に係わったメンバーのうち、団塊の世代の多くは東大に近い白山にも事務所を構えていた。私はそこに出入りするうち、金武湾闘争を知り、沖縄に戻って住民闘争に係わることになる。

那覇市在住の20代の若者で「CTSを阻止する会」を結成し、週末には金武湾に通って地域の住民との交流や援農、イベントの裏方をしていた。金武湾を守る会の共同代表の安里清信先生のご自宅で直接、戦争体験や昔の豊かな金武湾のお話を聞かせていただいたりした。金武湾闘争の支援活動をしていた「当時の若者」は、今もそのまま住民運動の伴走者として平和市民連絡会等の活動を行なっている。金武湾闘争は、沖縄の生きる道を考える原点であり、今の私の指針となっている。

金武湾闘争で支援者として、水俣や日本の公害問題、環境問題を教えて下さったのが宇井先生であった。先生は自主講座を行いながら沖縄に出向き、それを自主講座で全国各地に伝えた。沖縄では水俣の患者の悲惨な状況、企業城下町となって患者が分断され差別される状況を住民に伝え、国策を優先した結果がどうなるか、どのような地域社会を目指すべきか、判りやすく話された。宇井先生の話は人々に衝撃を与え、公害企業の進出を許さない、豊かな自然を守る決意を改めて固める契機となった。

毎日が闘い

宇井先生は日頃から日本は民主主義に則って動いていないと批判されていた。日本の文科省が扱う科学研究費の配分なども市民の視点はなく、学会ボスの意向に沿った配分がされていた。先生の専門分野の下水処理では、流域下水道に巨費が投下され、毎年巨額の維持費が必要とされる。無駄な設備を設置しその維持管理をゼネコンが独占する金食い虫の構造となっている。適正技術の10倍もの費用を要する無駄も数多くあり、税金を食いものにしている企業・行政・学者のトライアングルを宇井先生は厳しく批判していた。

宇井先生は水俣に係わる中で漁民や地域住民から多くの実学を学ばれた。生活の中の工夫は非常に合理的で、生活習慣や祭りにも歴史に裏打ちされた合理性がある。宇井先生が生涯持ち続けた現場主義は水俣に係わる中で身に付いたと話されていた。当時は高度成長・所得倍増の時代で、規模の利益が重視された。しかし、企業経営で利益を産む大規模化は住民にとっては公害被害者となる危険性の増大でしかなかった。住民にとって必要なのは適正技術であり、維持可能な地域社会である。

ところが沖縄では、「祖国復帰後」格差是正の掛け声の下、巨額の公共事業費に群がり、豊かな自然環境を食いつぶしてしまった。沖縄の自然環境の貴重さに気付かず、金の為に地域社会までも破壊し、精神の荒廃を招いている。特に軍事基地の押し付けとセットになった高率補助金のついた公共事業で、沖縄の自然環境が破壊されて、人々は生活の為に称して生活自体を破壊している。宇井先生の口癖は、沖縄の特性は亜熱帯で、小さな島であること。それは生態系が繊細で、もろく壊れやすい特質である。農業でさえ慎重になすべき脆弱な環境の中、霞ヶ関で決められた全国画一の工事規格による巨大公共事業で島を破壊すべきでない。沖縄には沖縄に合ったやり方が必要ということであった。

最も典型的な例は水に表れている。中北部の赤土汚染による赤い水と南部の畜産排水による黒い水である。宇井先生は畜産排水の垂れ流しは、行政指導の誤りの結果である。畜産排水は、窒素・リン酸を多く含み、畑には立派な肥料となるが、河川に流せばオニヒトデの異常増殖をもたらす、サンゴ礁を死に追いやっていると批判されていた。

金武湾を守る会の安里清信代表世話人も常々海は人の母である。母殺しである海の埋め立ては1坪たりとも許してはならないと話されていたが、宇井純先生も埋め立ての目的は土木工事の利権であり、公金を使うために埋め立て工事が計画され、豊かなサンゴ礁の海が犠牲になっていると忠告され、闘い続けられていた。

幅広いネットワーク

宇井先生は全国や海外の反公害運動や住民運動とのネットワークを大切される方で、その交流のための郵便物の数も並ではなかった。殆どは運動レポートやパンフレットで、英文のパンフレットもこれも山のようにあった。仕分けだけでも大変な作業で、先生の出張があると処理しきれない書類も出た。

宇井先生は、生活廃油から石鹸づくりを指導されてもいた。材料の廃油を学校や団地で集めて回り、出前で石

鹸作りも行なった。沖縄の水シリーズと言うパンフレットを手作りで作り、販売して運動の資金にしていた。あれこれ忙しくても海外や全国から宇井先生にいろんな企画も持ち込まれる。当時、「ピープルズプラン 21」というムーブメントがあり、沖縄で開催されることになっていた。宇井先生がホスト役を承諾し準備が始まったが、あいにく出張が重なった。結局、私が引き継ぎ、学生ボランティアや白保の運動仲間（故・比嘉 敏さんら）にも参加してもらって、パンフレットの広告取りからミュージックイベントの準備まで駆け回った。何とか国際会議の開催にこぎつけたが、アジア・太平洋十数カ国からの参加者の対応や会議の打ち合わせ、音楽祭の調整・進行等、問題続出であった。印象的なのは哲学者の花崎皋平氏がずっと密着して関わって下さり、オーストラリアのアボリジニ（ネイティブ）の方の深刻な問題意識を受け止めていただいたりしたことだ。宇井先生の忙しさがもたらした貴重な経験であった。

時には宇井先生の代理で海外出張にも参加した。最も思い出深いのは、1989年にタイのチュラロンコン大学で開催された「国際環境フォーラム」に先生の代理で出席をしたことであった。同行は宮本憲一先生、原田正純先生、淡路剛久先生等で、日本の環境問題を代表する先生方であった。皆さん非常にざっくばらんとした雰囲気で、楽しく勉強が出来た。フォーラムでは「日本からの公害輸出を止めさせる」、「アジアにおける日本人向けのエビ養殖の被害」といったアジアに拡大する環境問題と日本の関わりが討議された。

生涯の恩師

宇井先生の代理講義を沖大のみならず琉球大学でも行った。今でこそ現場の人を講義に呼び、生の声を学生に伝えることが多く行なわれているが、当時は稀で戸惑いがあった。

沖縄大学地域研究所の第1回研究成果発表会では、宇井先生と高良先生から私も研究発表を行うように伝えられた。地域研究所は沖大内教員で構成されるが学外者は特別研究員として年報や所報にも発表の資格がある。私は、最初から特別研究員でもあり、第1回発表では「沖縄の公共工事の実態」を自作のマップつきで、報告した。具体的にどのような工事がどこで進行中か発表したら思わぬ反響があった。聴衆は一般市民や研究者や市町村議員も参加していた。初の沖縄大学地域研究所の発表報告会であり、期待と熱気があったように思う。その時参加された方から現在の私の仕事につながる職務を推薦していただいた。専門家として将来やっていく為に、大学院

に進学することを勧められたのも宇井先生であった。横浜国立大学の大学院に進学し、帰沖して（財）沖縄労働経済研究所に職を得、後に（財）雇用開発推進機構にいたる。宇井先生の励ましと勧めがあって今の職業についているが、職務に追われて十分に宇井先生と共に環境問題に打ち込む時間が取れないで来た。申し訳ないと思うと同時に、先生から教わった現場に立脚し、住民の立場に立った専門知識の活用を心がけることは、私の信念となっている。

最後に、宇井先生と「適正技術」のモデルである恩納村喜瀬原の畜産排水池に行った事を記したい。そこは豚舎の糞尿水の池とは思えないほど清くなっていた。池を見つめる宇井先生の真剣な眼差しを今も忘れない。そして帰り道ホッとしたのか、先生は雄弁であった。過去国内外の思い出が片っ端から出てくるようだった。インド人は“議論好きでどうの”から始まって、安里清信先生のこと、中西準子さんと「万年助手」だった話から、海上保安庁の田尻宗昭さんのこと等々。生涯実験家として現場を重視した宇井先生だからこそ、喜瀬原の排水池が十分機能していることを確認して、いろんな思い出が次々と出てきたのだと思う。私も先生のことを考えると、多くの方のことが一緒に思い出される。

宇井先生は何時までも私の恩師である。

宇井先生のこと

大城 順子（沖縄環境ネットワーク世話人）

沖縄をこよなく愛され、沖縄の環境を守るために長年力を尽くされてきた宇井先生。いつも笑顔で、誰にでも親切に接しておられた先生が亡くなられたことは、私にとって大きなショックでした。もし宇井先生にお会いすることがなかったら、果たして私は自分の抱える多くの問題に正面から立ち向かうことができたでしょうか。

宇井先生の初めてお会いしたのは5年前、私の住む沖縄県南部の旧玉城村（現南城市）當山区に、南部地区10市町村のゴミを処理する最終処分場の建設が決定されたときでした。地域住民にとって寝耳に水の出来事であり、どのように反対運動を展開すればいいのか見当もつかない有様でした。しかし対策委員会の結成と同時に宇井先生にお会いする幸運が訪れたのです。知人の紹介でした。初対面にもかかわらず、親切に優しく接して下さるお人柄に心を打たれました。

「沖縄の多くの処分場を歩いて実情をしっかりと実感し、行政の何倍も勉強すること。ネットワーク型の運動体を築き、マスコミの協力を得て、先手必勝で行政に働きかけること」など、的確にそして丁寧に教えて下さいました。そのおかげで私たちも運動の輪はどんどん広がり、多くの支援にも支えられて、半年後にこの計画を白紙に戻すことができました。

この体験が私の生き方や考え方をどんなに変えてくれたことでしょうか。南部の広域行政の計画では当初下水道汚泥を焼却融解することになっていました。一日何十トンもの下水道汚泥を焼却融解することになれば、それにかかる燃料代、環境に及ぼす影響などが心配になり、3年ほど前に先生に相談しました。その際に先生は、福岡県の椎田町というところでは、すべてのし尿を水田の飼料として利用し、おいしいお米ができたと評判になっていることを教えて下さいました。

私はこの椎田町と、県内ですでに下水道汚泥の肥料化に取り組んでいる浦添市の取り組みを何度も行政に紹介しました。沖縄大学の土曜講座に参加して、フロアから沖大出身の首長に下水道汚泥の肥料化を検討して下さいようお願いしたこともありました。

そして先日、南城市でその取り組みが始まったことが分かりました。肥料は農家へできるだけ安く提供され、下水道処理水も二次処理して農地の灌漑用水として利用する計画だそうです。このことを真っ先にお伝えしたかった宇井先生に、もうご報告できないことが残念です。

「運動を通して日本は変わってくる。そうでなければ民主主義は育たないのではないかと」ご講演の中でおっしゃっていた姿が今でも忘れられません。日本の行く末を、そして沖縄の未来を誰よりも案じていらしたのではないのでしょうか。

ご冥福をお祈りいたします。



宇井先生と新石垣空港

鷺尾 雅久（沖縄環境ネットワーク会員／石垣島在住）

宇井先生のお名前は、東大で自主講座『公害原論』を始められた、そこでは決して珍しくない少し年嵩の助手の方として知っていました。しかし、宇井先生にとって新石垣空港が因縁浅からぬものであることは、お書きになっているものを読んで初めて知りました。

先生は、1986年に沖縄大学に赴任して来られたその次の日から、新石垣空港「白保海上案」をめぐる論争に巻き込まれたと随所で書いておられます。沖縄県当局から「反対派」のレッテルを貼られ、それが沖縄における宇井先生の位置を決めることにもなったように思います。

今の「カラ岳陸上案」についても、16年経って沖縄を去るときに、同じ空港の意見書を書いていると半ばあきれ半ば慨嘆するように書かれています。

私自身は東京にいた頃から、新石垣空港「白保海上案」のことにはある程度関心を持っていました。石垣に移り、2人の友人と新石垣空港問題をモチーフとするメールマガジン『白保メール』を発刊しましたが、宇井先生はそれも読んでいて下さいました。先生にお会いしたのも、沖縄環境ネットワークの新石垣空港環境アセスメントの勉強会が開かれた沖縄大学ででした。ご自分の部屋で煙草を吸っていらっしゃるのを見て、びっくりしたものです。

沖縄を去られた後に、新石垣空港環境検討委員会資料に対するコメントを寄せられたこともあります。その中には、「工事と空港供用の海域生物に及ぼす影響はほとんどないと考えられる」との記述に対する、次のような激しい言葉もありました。

「こういう恥知らずで無責任な言葉を、生物学者が良心の呵責なしに金のために書けるというところに、現代科学の危機的状況があると感じます。これだけの工事をやって生物には影響がないといった連中の名前を、石に刻んでおかないとならないでしょう」

那覇で開かれた新石垣空港環境検討委員会のとき、宇井先生の隣で傍聴したことがあります。委員長氏の進め方にあきれられ、立って「沖縄大学の宇井です」と名乗り発言されました。宇井先生と委員長氏が共に委員を務められた委員会での議論の内容の想起を求め、委員長氏の発言に疑問を呈されたものであったと記憶しています。普段の穏やかな話し振りとは違う、きっぱりしたお声が耳に残っています。

そのとき宇井先生を退場させようとした県職員に、先生への尊敬の念がひとかけらも感じられないことに驚きました。宇井先生を存じ上げなかったのでしょうか。或いは知っていてそのような行動を取ったのでしょうか。お体に掛けられようとした手を振り払い、宇井先生は退席されましたが、このような県職員しか持つことのできない住民の不幸を思わざるを得ませんでした。

石牟礼道子著「苦界浄土」には、若き日の宇井先生が何度も登場します。中には「富田八郎」（とんだやろう）のペンネームで出ているところもあります。そのときから50年近くも、宇井先生は常に問題のあるところにあり、「渦中の人」であり続けられました。宇井先生が沖縄を去られる少し前に書かれた文章に、次のような一節があります。

「故人となった玉野井芳郎先生、吉嶺全二さん、比嘉敏さん、具志堅古政さん、照屋和則さんたちに逢う時、弁解の言葉のないような人生をこれからも送りたいものである」（『けーし風』第37号所収）

まさにそのような人生を、宇井先生は送られたと思います。もうお会いできないのは残念ですが、今は、長い間お疲れ様でした、ありがとうございましたと申し上げたいと思います。

1986年7月、新石垣空港埋立事業環境影響準備書が縦覧され、8月に学者たちがその準備書を批判的に読む集まりがもたれた。宇井純先生も発表者のお一人であった。東京から飛んでこられたと勘違いしたが、その春から沖縄大学教授として沖縄に来ておられたのであった。そのとき以来、宇井先生に現場での実証の大切さを教えてもらった。

白保の新石垣空港の当初計画と同じく、サンゴ礁を埋めた新奄美空港の海域調査の必要性を白保を守る会の会議で指摘なされ、吉嶺善二さん(97年9月急逝)が工事中の新奄美空港周辺の海中写真を撮り、メディアに発表した。「埋立による周辺海域への影響は軽微」という環境アセスのでたらめさを実証し、白保海上の埋立計画を撤回させる大きな要因になったと思う。

宇井先生の専門領域である水処理技術で、安く設置でき、管理も農家自身が行えて、水も手間もいらない自然循環型の畜舎排水処理システムを確立なされた。その結果は、沖縄環境ネットワーク発行の小冊子「沖縄型・回分式酸化溝のすすめ」にまとまっている。

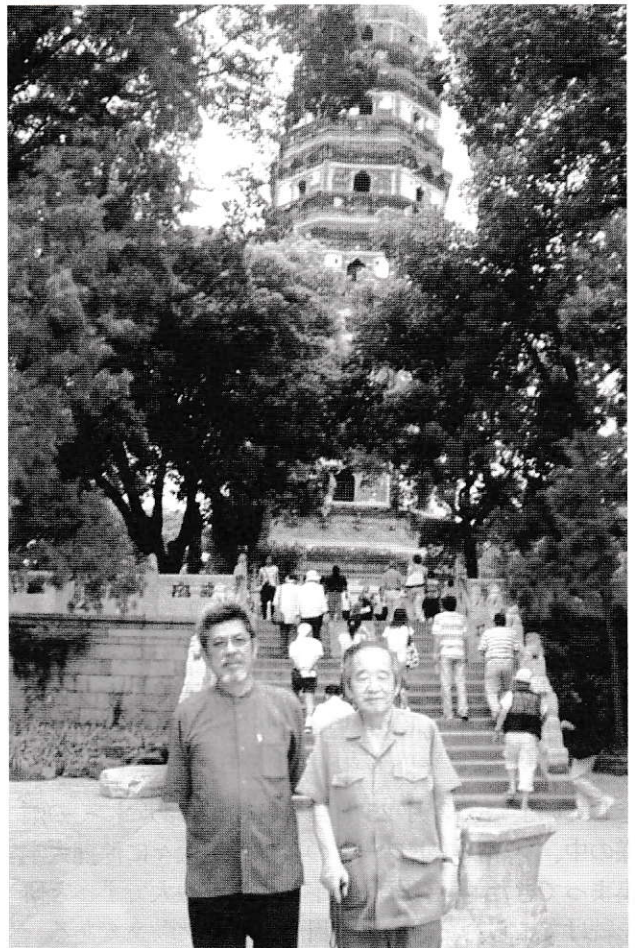
2005年夏、ピースボートの北東アジアの船旅に宇井先生が、韓国から上海まで水先案内人として乗船しておられた。私も上海から沖縄まで乗船したので、船のバーでお酒を酌み交わした。蘇州への一日のバスツアーを一緒に、いずれ沖縄か東京でお会いしましょう、と東京にもどる宇井先生を港でお送りしたのが最後になるとは。

1996年秋、日本環境会議沖縄大会を開いたおり、まとめの全体集会に、二日酔いで現れた比嘉敏君(96年12月急逝)が大演説をぶちあげ、宇井先生がはらはらしつつ見守っていた表情がまぶたに残っている。あの世で、比嘉敏君が先輩風を吹かせているのだろうか。

おそらく宇井先生が元気に外を歩かれた最後の蘇州…。先生にメールで送ったかどうか定かではない写真を添えます。宇井先生との20年に感謝しています。

合掌。

真喜志好一(沖縄環境ネットワーク世話人)



宇井純先生を偲ぶ会レポート

酒井 哲哉（事務局）

昨年11月に宇井先生がお亡くなりになった直後から、全国各地で宇井先生を偲ぶ催しが企画され、早いところでは12月に行われたところもあった。ここ沖縄でも当然のごとく、宇井先生にお世話になった環境運動グループを中心に追悼のための企画が持ち上がった。いくつもの団体が手を挙げたが、実行委員会方式でまとまった大きな追悼イベントにしようということになり、「宇井純先生を偲ぶ会」のプロジェクトが今年早々に立ち上がった。中心になったのは沖縄大学の教職員と学生およびOB、沖縄中部地域の住民運動グループ、そして沖縄環境ネットワークで、事務局はネットワークが担当することとなった。

数回の実行委員会を積み重ね、3月25日を丸一日使って「宇井先生の足跡に辿るフィールドワーク」「追悼講演会」そして立食形式での「偲ぶ会」という3つの催しを行うことに決まった。各々の催しの担当もフィールドワークは学生・OB、講演会は環境ネットワーク、偲ぶ会は住民運動グループと決まり、各担当が連絡を取り合いながら詳細を詰めていった。

そしていよいよ3月25日当日、朝からあいにくの雨模様の中、フィールドワークの参加者が次々に沖縄大学に集まってきた。集合場所は、宇井先生が沖大でずっと研究を続けてこられた思い出の場所・化学実験室である。沖大のバス（29人乗り）をお借りしての行程なので、一応は事前受付をして大体の参加者は把握していたのだが、当日になるとそれ以外の参加希望者もずいぶんやってきた。お父さんに連れられた中学生もいる。この日のために東京からはるばる来て下さった宇井先生の奥様や息子さんの家族も参加している。結局、バスは定員ギリギリの満車状態で午前9時半に出発した。これから、本島南部の南城市にある「金城農園」（宇井先生が考え出した回分式参加溝による污水处理システムが稼働している）や、北部の恩納村にある「ちゅらさ石けん工房」などを回って、宇井先生が沖縄に残して下さったものを再確認するのだ。バスが出かけていったあと、事務局に戻って講演会の準備にかかる。

午後2時まえに再び沖大へ。講演会の会場は大きな階段教室だ。横断幕を張ったりしていると、もうちらほらと参加者がやってくる。開場は3時半なのだが…。

そして定刻の少し前に開場。次々と参加者が受付に列を作る。結局、講演開始時には120名近くが入場していた。4時から始まった宇井先生の東大時代の教え子で環境ネットワークの世話人代表でもある桜井国俊沖縄大学学長の講演は、大学時代の出会いから始まって1時間余

にわたって、宇井先生の思い出と沖縄の未来への展望を語る熱のこもったものだった。別会場で「偲ぶ会」の準備をしていたメンバーたちも、皆こちらにやってきて聞き入っていた。

5時過ぎ、講演は終了。その後、30分ほどのインターバルをはさんで「偲ぶ会」が始まる。参加者はほとんど帰る人がなく、みなそちらの会場へ移動を始めたが、受付は宇井先生関連の書籍を買う人が何人もいて、なかなか片付けることができない。偲ぶ会の方は向こうの担当におまかせすることにして、せっせと書籍の販売に精を出す。

その間、別会場の「偲ぶ会」は予定通りに開催され、まず沖縄の各地から運ばれてきた水による「献水」と献花が行われたあと、宇井先生と様々な関わりを持つ人たちがそれぞれ、宇井先生の思い出を語った。みな印象に残るコメントだったが、中でも沖大を卒業したばかりの横山正見くんの話は心に響くものだった。

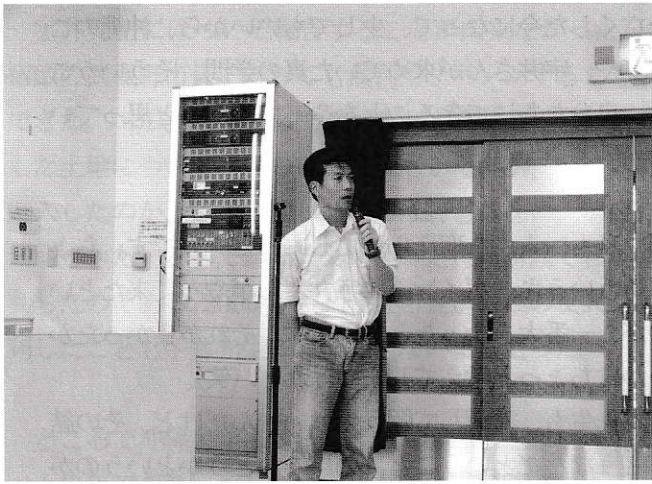
横山くんは宇井先生に直接指導を受けた経験はないが、宇井先生が開いていた市民とともに学ぶ「自主講座」の精神に感動して、去年の8月に、11月に開かれる学園祭での講演を依頼した。すぐに返事が届いた。内容は具体的で、テーマは「大学における講義と自主講座」とし、体力面を考えて講演を短く、質問を長くとることなどが綴られ、「学生の熱意に動かされ、少なからず無理をする気になりました」と結ばれていた。

しかし、その講演予定日の前日、宇井先生は亡くなられた。講演はかなわなかったが、横山くんは「宇井先生から大切なメッセージをいただいた。『学び』は大学だけにあるわけじゃない。現場というものを一番大切に、暮らしから学んでいきたい」と語った。

このスピーチは印象的で、地元紙が彼の話ピックアップして掲載したほどだった。最後に挨拶に立った宇井先生の奥様・紀子さんも、「本人は亡くなったけれど、その教えや残した種は着実に沖縄に育っている」とうれしそうに話されていた。

こうして長い一日が終わった。私たち実行委員会のメンバーは、宇井先生のご遺族も交えて、ささやかなお疲れ様会を開こうと準備していたのだが、それは別の形で実現することになった。何と紀子さんが、我々のためにすでに一席設けて下さっていたのだった。そしてその席で、ようやくしみじみと、そして楽しく、宇井先生の思い出を語り合うことができたのだった。この催しで元気づけられたのは、私たちの方であった。

私たちの心の中に、いまでも宇井先生は生き続けている。



私にとっての宇井先生

～宇井先生をめぐる座談会より～

3月25日の「宇井純先生を偲ぶ会」に先立って、宇井先生と関わりの深かった各分野の6名に集まっていただき、宇井先生の思い出を語る座談会を開いた。

この座談会の内容は、偲ぶ会当日に配布された資料に掲載されているが、2時間余に及んだ座談会のほぼすべてを収録したため、膨大な分量となっている。

そこでここでは、その最後の部分、「みなさんにとっての宇井先生とは」という問いかけに答えたまとめの部分のみ抜粋してご紹介する。

参加者は

伊波義安（奥間川流域保護基金代表）

寺田麗子（フリージャーナリスト／元・沖縄テレビキャスター）

仲西美佐子（恩納村エコツーリズム研究会代表）

桜井国俊（沖縄大学学長）

真喜志好一（建築家）

内海正三（沖縄環境ネットワーク／司会も）である。

内海 みなさんそれぞれにとって、宇井さんはどういう存在であったのか、宇井さんから学んだことをどう生かしていくのか。

伊波 私は、宇井さんの本を通してそうですが、自分の住民運動を通して、偽者と本物を少しは見分けられるようになったかと思います。住民運動の中で感心するのは、権力に対して弱かった一般の人たちが、権力が偽物なのか、権威がどうなのか、見抜けるようになりますし、あまり人前では発言しなかった人たちが発言するようになります。

大学で勉強した化学はあまり役に立たなかったのですが、公害の勉強をするようになって、化学だけでは解けない、生物学も歴史も経済も知らなくてはいけない。総合的なものを知らないと公害問題は解けない。宇井さんは水の問題が専門かもしれないが、いろんな事物を見通せるそれなりのものを持っていたのではないかと。だから、私にとっては生き方を方向付けてくれたのが宇井さんではないかと思います。そして、宇井さんはたくさんの人の生き方に影響を与えただろう。宇井さんのなさった学問は、真髓を突いたものであった。しかし残念なことに、私たちがそれを十分に受け継げなかった。宇井さ

んを亡くした今になって、少しでもいいから、沖縄のこの環境や、宇井さんが求めていた真の学問、そういうことを、自分たちにできることをやってみたいと思っています。

仲西 私も、人生を変えられてしまった一人です。ちょうどそういうキーポイントに宇井さんがやって来たというのが、一番大きかったと思います。それが良かったかどうかはちょっと考えてしまうけれど（笑）。

宇井先生も、対面して闘うのはいいんだけど、その結果、どうなんだということ、効果的かどうかというのが悩みなんです。全体を良くしたい場合、粒が小さいために効果がない。宇井先生の場合は大きな石を投げるから相手もどうにかなるんだけど、私らが投げてもし小さいから（笑）。もっといい方法がないだろうかあとと思っている最中です。

伊波 だけど、それは小さくても積み重ねだし、もうひとつ、宇井先生は、仲西さんもそうですが、ずっと継続している、積み重ねているでしょう、その成果は、必ず出てくるとしていますよ。

仲西 すごい……慰められているんだけど（笑）。時代的なこともたぶんあるだろうし、宇井先生がやってきたことと、私たちがやっていく、いろんな方向をそれぞれがやっていけるような、もっと効果的に。ちょっと効果も見たいし。気晴らしばかりやっていてもしょうがないなど最近思っているんです。運動をされていてスカッとする部分があるじゃないですか、そこだけを私は宇井先生から受け継いでいたような気がして。もっと効果的な手を考えたいと思います。

寺田 私はとにかく番組を宇井先生とたくさん作りました。面白かったのは、久茂地川の工事で浚渫をして川底に石を敷き詰めるんです。あのときに、県が計画を発表して、工事をやるとなったときに、「何か変じゃないか」と思って宇井先生に聞きに行った。宇井先生も「おかしい」となって、最終的に久茂地川に筏を組んで、宇井先生と私とほか何人かが並んで、久茂地川の浄化についてという生番組をやったんです。そのときに、県も呼んだんですが来なかった。交渉して来ることになっていたのが、直前になってすっぱかししたんです。番組の中でそれを言って、宇井先生は「県は敵前逃亡をした」と（笑）。

闘う敵は大きければ大きいほど面白いですよ。宇井先生と一緒にいろんなことをやりながら思ったのは、ずっ

と下調べをして、こっちがおかしいぞと思ったことを宇井先生は肉付けし理論構築をしていく。そのタッグマッチが大変効果的だったんです。いろんな部分で変えることができたこともありました。

「河川環境シリーズ」(沖縄テレビの夕方のニュース枠で1981年10月から開始され、今も続いている名物企画)は、県庁からリリースをもらわないのをモットーにしている、いつも現場から取材をして最終的にはインタビューという形で行政には行くわけですから、行政には嫌われていつも居留守を使われていた。だから、現場から見るとは正しいのだと、宇井先生といろんなことを一緒にやる中で確信を持ってました。そして、喧嘩は重要で、喧嘩することを恐れてはいけません。それまでも県庁とは喧嘩していましたが、自信を持って喧嘩できるようになったというのが一番大きかったかな(笑)。宇井先生は私にとって、何かあったら駆け込む、駆け込み寺みたいな感じでした。

真喜志 僕は一応マスターを出て学問の入り口ぐらいまで行ったのですが、沖縄に戻ってきて、宇井先生と会うまでは、7~8年近い研究生生活を「無駄だった」と思っていたのが、宇井先生と出会って白保のアセスを科学的に追いかけていくときに、自分がやってきた学問が活きてきたわけです。そして白保を海から追い出せた。今でも、石垣の現空港を拡張することが正しいと思っているし、しつこく裁判をやっているわけですが、辺野古、そして東村高江のヘリパッドなど新しく作られようとしている米軍基地なども、正しい情報に基づいて正しく運動理論を組み立てていくと必ず「勝てる」と思う。これが、僕が宇井先生と白保の運動を共にしたことのできたことです。

内海 私は出発点が政治少年だったものですから、宇井さんと知り合った時点でも、政治志向が圧倒的に強くて、今ある社会主義国に対しての何らの幻想も持っていないけれど、自分たちの目指すべき、理念的な社会を追い求める発想が、抜けきれずにずっとあったわけです。そんな中で宇井さんは、何でも挑発するわけです。私もそのときそのときの住民運動や平和闘争をやるわけですが、いつも「それでいいのか」ということを言われているような気がして、だからとっても恐かった。そういうのが私にとっての宇井さんですね。

桜井 僕は7年前に沖縄に来て、地域研究所の職員が辞められるときの送別会をこの部屋でやったんです。3月

の下旬でしたね。宇井さんに誘われてきたら新崎盛暉さん(当時の沖縄大学学長)もいて、新崎さんが「なんだ、宇井さんところの大学院生か」って言われたのが忘れられない(笑)。僕は東京の武蔵野市に住んでいて、市政を変えようという住民運動をやっていたんですが、やはり国を変えなければだめだと、大学を辞めて立候補したわけです。二度やって、二度目は1999年です。宇井さんは私の推薦人なんですが、「沖縄に来ないか」と言われて、何を言っているんだ、今度は勝つんだと憤慨したわけだけど(笑)。結局負けて、沖縄に来たわけです。来てすぐにG8の沖縄サミットがあった。サミットに対抗してNGO国際環境学会をやろうとしたら、宇井さんが倒れてしまったじゃないですか(注:脳腫瘍で手術した)。

寺田 ありましたねー。

仲西 あのときは大変でしたよー。

桜井 まあしかし、これはやはり乗りかかった船だからしょうがないと、フォーラムを開催して、準備に追われてある日授業があるのも忘れてしまった。授業を忘れたのは後にも先にもその一回だけです。

でも、あのとき思ったんですが、どうやってこの基地の見返りでズブズブの麻薬漬けから抜けられるのか、「こうしたら抜けられる」という説得力のある我々のものが提示できない限りこの麻薬はやめられない。これが課題であるし、環境ネットワークの課題でもあります。大学で学生たちと一緒にやっていると、沖縄の未来をどう作るか、麻薬漬けではなく、二本の足で立っていく、自分たちのプランが作れない限り、いくら批判を言ってもしょうがない。それは自分たちの足元からひとつひとつやるしかない。ひとつひとつ取り組む中で見えてくるのではないかとやるしかない。宇井さんに呼ばれて沖縄に来たことはハッピーであったと思いますが、そういう課題は残されていったのだらうと思います。

内海 東京の友人には、「宇井さんが沖縄に行っているのに、あなたたちは桜井さんまでとるのか」と非難されました(笑)。

寺田 ありがたいことです。

内海 今日はみなさん、ありがとうございました。



環境情報おきなわ(2007 年 5 月～2007 年 7 月)

◆『宇井 純さんを偲ぶ会』東京で開催

宇井先生を偲ぶ催しが全国各地で続く中、先生が長らく在籍した東京大学でも、先生の残したものを後世に伝えるための催しが行われることとなりました。

●日時／2007 年 6 月 23 日 (日)

1. 昼の部 (13 時～16 時)

「公開自主講座・宇井純を学ぶ」

会場／東京大学安田講堂

講演：宇井さんの言葉と仕事は、何だったのか
淡路剛久 (早稲田大学教授)、宇沢弘文 (東京大学名誉教授)、最首悟 (和光大学名誉教授)、桜井国俊 (沖縄大学学長)、原田正純 (熊本学園大学教授・水俣学研究センター長)、宮内泰介 (北海道大学准教授)、吉岡斉 (九州大学教授)

討論：宇井さんの言葉と仕事を、今後の研究と教育にどう活かすか

パネラー：鬼頭秀一 (東京大学教授、環境倫理学)、山下英俊 (一橋大学講師、廃棄物・リサイクル研究)、友澤悠季 (京都大学大学院生、公害論研究)、三輪大介 (京都精華大学大学院生、コモンズ研究) ほか

モデレーター：小林和彦・井上真

資料代／1000 円

2. 夜の部 (18 時～)

「宇井純さんを偲ぶ集い」

会場／文京区民センター 3A 会議室

発言：宇井紀子、桑原史成 (写真家)、坂東克彦 (弁護士)、野忠義 (カネミ油症被害者)、早乙女順子 (那須の自然に学ぶ会)、平仲信明 (元ボクシング「ウェルター級世界王者・沖縄在住」、柳田邦男 (ノンフィクション作家)、立川勝得 (元「大学論」実行委員会)

メッセージ：石牟礼道子 [代読]

献杯：土本典昭 (記録映画作家)

懇談：バイキング方式のドリンク・軽食を用意します。

献花：休憩・懇談時に季節のカラフルな花を献花する遺影コーナーを設けます。

参加費／2500 円

問合せ／「宇井純さんを偲ぶ会」、公開自主講座「宇井純を学ぶ」実行委員会

Tel 03-3824-7238 (亜紀書房)

E-mail / ui@akishobo.com

◆引き続き辺野古へのカンパをお願いいたします

名護市辺野古では、いよいよ海洋調査が実施されようとしています。反対する人々への圧力がより強まること予想されます。これまでも増してのご支援をよろしくお願い申し上げます。カンパの振込先は右記の通りです。

●琉球銀行南風原支店 普通口座 331-622

タカミネ チョウセイ

※カンパに関するお問合せは沖縄環境ネットワークまで

◆【書籍販売】 郵送します

◎『沖縄の環境と平和』1,000 円

◎『低周波音公害調査報告書』500 円

◎『沖縄から世界へ』1,000 円

◎『沖縄からコスタリカへ～平和憲法とエコツーリズムの旅』1,000 円

◎『沖縄型・回分式参加溝のすすめ』500 円

◎『沖縄のエコツーリズムの可能性』1,000 円

事務局 (098-861-1101) までお問合せ下さい

◆沖縄環境ネットワーク世話人会 参加自由です！

日 時：お問合せ下さい

場 所：沖縄環境ネットワーク事務所

◆2007 年度総会のお知らせ

本年度の総会を 6 月 30 日 (土) に予定しています。

会員の皆様のご参加をお待ちしています。詳細は来月にお送りする総会資料に同封いたします。

◆事務所移転のお知らせ

沖縄環境ネットワーク事務所は 4 月より下記に移転いたしました。電話番号・ファクスともに変更されておりますので、ご確認下さい。

那覇市久茂地 3-29-41 久茂地マンション 401

TEL. FAX098-861-1101



■編集後記■

宇井先生の追悼特集号をようやく発行することができました。この間、宇井先生を偲ぶ会の開催、息つく間もなく事務所の引越しとドタバタのうちに新年度に突入。慣れないマンションでの作業もようやく一段落し、少しは落ち着いて仕事ができるようになってきました。お待ちいただいた会員の皆様には発行の遅れをお詫び申し上げます。(哲)

沖縄環境ネットワーク通信・第 35 号

2007 年 5 月 10 日発行

発 行 〒900-0015 那覇市久茂地 3-29-41

久茂地マンション 401 号

沖縄環境ネットワーク

TEL/FAX 098-861-1101

E-mail / netwind@atlas.plala.or.jp

発行人 桜井 国俊 編集 酒井 哲哉

http://homepage1.nifty.com/okikan/